

平成23年度 日本語教育能力検定試験

試験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

[解答と解説]

アークアカデミー

※本解答解説は，平成24年1月16日現在のアークアカデミーの考えです。

※試験Ⅱは解答のみで解説はありません。

※無断での複写・複製を禁じます。

試験 I

問題 1

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)
2	2	1	3	4	1	2	4	1	5	4	2
(13)	(14)	(15)	(16)								
4	5	5	1								

【解説】

- (1) 2のみ「鼻音」。他は破裂音。
- (2) 2の「テ」の調音点は歯茎。他は後部歯茎（歯茎硬口蓋）。
- (3) 1「専門」は単独では平板型であるが、後項に「店」がついた「専門店」では、「センモンテン」とアクセント位置が変化している。他は元の語のアクセント位置は保たれている。
- (4) 3「散らす」の対になる自動詞は「散る」(・ru)。他は、「荒れる」「揺れる」など・reru。
- (5) 4以外は「貸し出す」「見落とす」「話し合う」「書き直す」など複合動詞の形がある。
- (6) 1は形容詞の副詞的用法。「真剣に」を省略しても文が成り立つ。
- (7) 2「書き上げる」の「あげる」は「最後まで完成させる」の意味。
- (8) 4のみ現場指示の用法。他は文脈指示。
- (9) 1は感情形容詞。他は性質・状態を表す形容詞。
- (10) 5は「両親の利益になるように」の意。他は前の名詞が後の動作の目的を示す。
- (11) 4「沖で釣る」で「場所+動作」。他は「手で書く」など「手段+動作」。
- (12) 2事実に対して、自分に都合がいい決定をしたとみなす用法。他は自分の意志による決定。
- (13) 4は外の関係。他は内の関係。
- (14) 5は所属を表す。他は立場を表す。（1～4は「大阪が出身地です」などの言い換え可能）
- (15) 1～4は強制の意を表す。5は起こった出来事（子どもが死んだこと）に対して、話し手が負い目、責任を感じているときの使役表現。
- (16) 1単純な過去の事実。他は変化の結果を示す。

問題 2

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
3	4	1	3	2

【解説】

- (1) (誤用) 複数ある音読みの誤用 → 3「がっき」とするべき誤用（促音化の誤用）
- (2) (誤用) タ形にする部分の誤り → 4文全体の時制の誤り
- (3) (誤用) 複合助詞の脱落 → 1助詞の選択の誤り
- (4) (誤用) 対象格の「が」を「を」とした誤用 → 「なくなる」の主体を表すガ格の誤用
- (5) (誤用) 三人称が主体であるときの述語動詞の形態 → 1人称が主体のときの誤用

問題3

A					B				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
2	1	1	4	4	4	2	3	4	2
C					D				
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
3	3	4	4	1	4	3	4	1	1

【解説】

A

- (1) 2は異なる言語形式であるが、意味は同じである。
 (2) 1意味の区別をもたらす最小の音声の単位を音素という。
 (3) 日本語のアクセントには、語の弁別機能と統語機能（境界機能）の二つがある。
 (4) 1漢字が代表例。2中国では漢字一字が語でもあるので表語文字という捉え方もある。3アルファベットが代表例。平仮名・片仮名は音節文字である。
 (5) 1「開ける」「明ける」、2「早い」「速い」、3「始め」「初め」と文字が異なれば意味も異なっているが、音声は同じである。4は「高い」の対義語が2種類あるということ。

B

- (6) 4「男でなければ女」「当たりでなければ外れ」という反義語のペアは相補関係という。
 (7) 「とても暑い」「少し暑い」などの「とても」「少し」などの程度副詞がつけられる。
 (8) 3坂道を上から見れば「下り坂」、下から見れば「上り坂」となる。
 (9) 4「丁寧な説明」「ぞんざいな扱い」と共にナ形容詞（形容動詞）のペアである。
 (10) 1は「家庭と仕事とどちらが大事か」であれば適当な例となる。他も同様。2のみコンテキストに基づく対義関係にある。

C

- (11) 3（ア）「丸い→丸まる」、（イ）「高い→高さ」などが例として挙げられる。
 (12) 3「礼」は漢語であるが、「お」がついている。他に「お電話」「お医者」なども例外。
 (13) 4「公的な立場」というナ形容詞の用法以外に「公的年金」のように名詞に直接つく。
 (14) 4「色めく」「艶めく」「時めく」「春めく」など限られている。
 (15) 1「規模が大きいこと」は「大規模（だいきぼ）」である。

D

- (16) 1「英語を話す→英語が話せる」、2「準備をする→準備がしてある」、3「ビールを飲む→ビールが飲みたい」と格関係が変化する。4は変化しない。
 (17) 3元の能動文にない要素がガ格になるものを間接受身文という。
 (18) 4「赤ん坊が泣く→赤ん坊に泣かれる」と自動詞文も受身文になる。
 (19) 1「くれる」の基本的な文（「兄が私に小遣をくれた。」など）を考える。
 (20) 1表が参考になる。与え手、話し手がガ格になりやすい。

問題4

問1	問2	問3	問4	問5
1	3	4	1	1

【解説】

- 問1** 1 アチーブメントテストは、コースでの既習事項を確認する到達度テストである。
- 問2** 「コンプリヘンション・アプローチ」は、理解、特に聴解を優先する教授法である。
- 問3** 「クラッシュの五つの仮説」。4はインターフェイスの仮説ではなくノン・インターフェイスの仮説であれば合う。選択肢以外では「モニター仮説」が加わる。
- 問4** 1 試行錯誤を通じて学習者が自ら学んでいく教授法。教師は不必要な発話や干渉をしない。
- 問5** 1 形成的評価は通常、学習単位が終わった後に教師自作のテストなどで行われる。

問題5

問1	問2	問3	問4	問5
4	4	4	1	2

【解説】

- 問1** 日本語教育に限らず、教育観・学習観は、教師から学生・生徒・学習者への一方的な知識伝達型から、学生・生徒・学習者自身の活動参加による学びに変わってきている。
- 問2** 「互いに支援する形」に合うものは4番しかない。
- 問3** 1は「議論の収れん」、3は「リーダーシップが発揮しやすい」が論外。問題文に「単なるグループ活動ではなく」とある。2では従来のグループ活動と変わらない。
- 問4** 1 自律学習ともいう。
- 問5** 2のような態度では、新たな気づきや学びはうまれてこない。

問題6

問1	問2	問3	問4
3	2	4	2

【解説】

- 問1** 「OHCならではの特性」で考える。1、2は紙媒体で十分である。4は「長文の新聞記事」であるので、手元にある方がむしろ読みやすいであろう。
- 問2** インターネットに限らず、引用においては、質的量的に「引用部分が従」である。
- 問3** 速読の技術を身に付けたい学習者には、スキヤニング・スキミングなどの速読技術の指導が優先的であろう。その上で、速読の練習に適切なコンテンツが豊富にあるところを紹介することが考えられる。例えばニュースサイトで、見出しを見て読みたい記事をスキヤニングする、概要を把握する練習をするなどが考えられる。
- 問4** 3 インターネットでは、書かれている情報の真偽が不明なものが多数ある。ネット上で得た情報を、安易に広めることは慎まねばならない。もちろん有用な情報も多いのも事実である。それらをいかに適切に利用していくかがメディアリテラシーである。

問題 7

問1	問2	問3	問4	問5	問6
3	1	3	2	3	1

【解説】

- 問1** 誤用(error)を「発達上の誤り」と捉え、学習過程で必然的に起きるものとして、この error を分析し、習得過程を明らかにしようという考え方に移行している。
- 問2** 1 「おいしいだと思imasu」の下線部が問題。
- 問3** 語用論的能力とは、社会的文化的コンテキストの中で適切に言語使用が行える能力をさす。1 教師からの指示に対して「～から」「～んです」を使って、その指示に従えないことを表明しているところ、2 教師に対して「手伝ってあげる」という表現、4 他者の未来の行動を直接的に聞こうとする表現が、語用論的能力の不足によるものと考えられる。
- 問4** グローバルエラー(global error)は、全体的な意味があまり通じないような発話や文のことである。ローカルエラー(local error)は、全体の意味は通じるが、文の構成上問題があり、何かの文法事項に誤りがあることを指す。2の「そうですか」の上昇調と下降調では、疑問と叙述という大きな差が生まれる。
- 問5** ロールプレイはある特定の目的・課題を遂行することに重点を置いた練習である。
- 問6** 苦手だから使わないようにするというのは回避戦略である。結果として誤用が表に出てこないという問題点が出てくる。

問題 8

問1	問2	問3	問4	問5	問6
3	2	4	1	3	1

【解説】

- 問1** セリンカーが提唱。外国語を学習途上である学習者によって作り出される言語をいう。
- 問2** 文法規則を過剰に適用させてしまうこと（一般化させること）で起こる誤りをいう。
- 問3** 語用論的転移は、母語及び母語社会の社会的・文化的コンテキストのありようをそのまま第二言語の社会、文化の中で適用させようとするものである。4のように相手の欲求を直接聞くことは日本語では行われませんが、この発話者の母語文化ではごく普通のことと推測される。
- 問4** 言語間エラーは母語からの負の転移により起きるもので、言語内エラーは、母語に関係なく、目標言語の学習過程で起きる発達途上の誤りである。
- 問5** ある種の誤りがそのまま定着してしまう状態を指して「化石化」という。
- 問6** フォリナートークは、ゆっくりした話し方、はっきりした発音、やさしい語彙、簡単な構造の文を多用するなどの特徴がある。

問題9

問1	問2	問3	問4
2	1	3	1

【解説】

問1 1 予測は背景知識の活性化も伴うので、文化的な含意が含まれうる。3 後続文脈の範囲を狭める方向へ働く。4 正しくないことが確認されても文章理解に貢献する。

問2 構造に関わるスキーマと内容に関わるスキーマの二つが関係し、それぞれ形式スキーマ、内容スキーマという。

問3 テキストの意味的結束性を構成する情報を補うことで、テキストの内容理解に必要な意味的ギャップを埋める推論のこと。例えば「彼女は花瓶を落とし、新しいのを買った」とあれば「花瓶は割れた」と推論したり、「朝食」とあれば「ご飯とみそ汁」「パンとコーヒー」など特定の例を列挙したりするなどである。その他の推論のタイプとしては、「精緻化推論」と呼ばれるものがある。これは、ストーリー展開を予測したり、筆者の意図、場面の状況、テーマなどを補って理解内容を精緻化する推論のタイプである。

問4 心的表象とは、読み手があるテキストを読んだあと、あるいは聞き手が談話を聞いたあと、頭の中に記憶として残ったものを指す。これには問題文にもあるとおり、表層形式、テキストベース、状況モデルの三つのレベルに分けられる。

表層形式（表層的記憶）は、自動的な単語認知や統語解析に基づく純粋に言語的な表層表現に対する記憶表象である。また、テキスト中のそのままの単語配列に対する記憶であるため、他の心的表象（テキストベース、状況モデル）に比べて、最も記憶に残りにくいとされている。

テキストベース（命題的テキストベース）は、概念的なレベルの表象を指す。テキストの意味内容がまず命題と呼ばれる概念単位に分析され、次に全体的な命題間の連合ネットワークとして構築された表象であり、テキストそのものの意味について忠実に構成されるものである。

状況モデルは、読み手や聞き手の既有知識や語用論的知識、さらには現実世界に関する知識を結び付いた当該テキストの状況に対する総体的認識そのものの記憶表象であり、長期記憶に最も保持されやすい表象である。（以上参考『応用言語学辞典』研究社）

上記をもとに4つの選択肢を検証すると、1が表層的記憶、2、4が状況モデル、3がテキストベースと考えられる。

問題10

問1	問2	問3	問4
3	4	3	1

【解説】

問1 ホストにとっての文化的気づきであるから、自文化からどのような影響を受けているかを知るとしている3を選ぶ。

問2 4 異文化間教育に用いられるシミュレーション・ゲームとしては、バファバファ、エコトノス、バーンガが挙げられる。

問3 直前の「この段階では」が気になるところ。一般的事例と特定文化の事例と両方学ぶべき

かどうか。

問4 2～4は明らかにソーシャルサポートに関する適当な記述。1は物質的なサポートも適応支援の効果が期待できる。

問題11

問1	問2	問3	問4	問5	問6
2	3	3	4	3	2

【解説】

問1 それぞれ積極的面子，消極的面子ともいう。

問2 仲間内で使う言葉を使うことで、「仲間の一員」として認められる。人に好印象を与え、認められる行為と言える。

問3 「ノートを貸してほしい」という依頼は、相手のネガティブフェイスを脅かす行為である。一方で、それを「断る」ことは話者のポジティブフェイスを脅かす行為にもなるため、依頼されたものは断りにくい。そこで「無理なら他の人にあたる」という、相手の自由を尊重する発言をすることで、相手のネガティブフェイスを満足させようとするのである。

問4 相手のポジティブフェイスを保持することにより実現されるものをポジティブ・ポライトネスといい、相手のネガティブフェイスを保持することにより実現されるものを、ネガティブ・ポライトネスという。ポライトネスの概念は、ブラウンとレビンソンによる。

問5 何かを言う前に付けたすものを「注釈」という。聞き手への配慮を明確にし、かつ、そのような社交的言語使用のテクニックを持っているということで、話者の社会的評価を高める働きももつ。

問6 1「いらっしゃる」は人に対する敬意を表すもので、「お宅」には使うのは「規範的」とは言えない。3「おる」は、自分が「いる」ことについて丁寧に言う時に使う。西日本では「おる」を相手にも使えるが、地域差があるものを「規範的」とは言えない。4「ございます」は「ある」の丁重語である。

問題12

問1	問2	問3	問4
2	3	1	2

【解説】

問1 ジェンダーと深く関わりのある用語を選ぶ。

問2 3「看護婦」は女性のみを指すが、「看護師」であれば男女の区別をしていない。

問3 1男子中学生が男子同士で話している際に「わたし」はほぼ使われてないであろう。

問4 選択肢2のとおり。

問題13

問1	問2	問3	問4	問5
4	2	4	2	2

【解説】

- 問1** 標準語と地域方言が「取り替え」というのであれば、4標準語化である。
- 問2** 標準語と地域方言の二つの言語形式が「棲み分け」しているのは2。
- 問3** 「ネオ方言」は真田信治が提唱した考えで、標準語と方言の接触の過程で、地域方言話者が、標準語のスタイルからも、地域方言のスタイルからも逸脱した新たなスピーチスタイルを作りつつあることを表す用語として定義した。従って、あくまで「スタイル」であって、「言語体系」というものではないのだが、強いて選ぶとするなら4しかない。
- 問4** 1ピジン(洋風英語)は商取引等、ある限られた目的のために、文化的・経済的に優勢な言語を基盤として生み出される混成語。それが母語化すると4クレオールとなる。3ダイグロシアは2つの言語変種が同時に社会に存在している状態のこと。
- 問5** 江戸時代まで文化の中心地であった上方の言葉は強く影響している。

問題14

問1	問2	問3	問4	問5
4	4	2	3	1

【解説】

- 問1** 在住外国人の支援を目指す包括的な政策を「統合政策」という。
- 問2** 4「留学」「就学」の一本化は2010年7月1日付のことである。
- 問3** アジア人財資金構想サイトの説明を以下に引用する。
「優秀な留学生の日本への招聘、日系企業での活躍の機会を拡大するため、産業界と大学が一体となり、留学生の募集・選抜から専門教育・日本語教育、就職活動支援までの人材育成プログラムを一貫して行います。」 <http://www.ajinzai-sc.jp/asia.html>
- 問4** 厚生労働省平成21年4月広報資料「日系人就労準備研修事業を始めます」から一部引用
「本年度より、日系人が集住する地域において、安定就労への意欲及びその必要性の高い日系人求職者を対象に、日本語コミュニケーション能力の向上、我が国の労働法令、雇用慣行、労働・社会保険制度等に関する知識の習得に係る講義・実習を内容とした就労準備研修を財団法人日本国際協力センター（JICE）への業務委託により実施することとしております。」
- 問5** 文部科学省「虹の架け橋教室」（平成21年度補正予算事業概要）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/shiryou/attach/_icsFiles/afie/ldfile/2009/06/23/1279305_003.pdf
ブラジル人学校等に在学中の子どもたちへの日本語教育支援事業で、公立学校への円滑な転入を目指している。

問題15

問1	問2	問3	問4	問5
2	2	1	4	1

【解説】

問1 2 日本語を母語としない人の日本語能力を測定し認定する試験は日本語能力試験である。

問2 海外では国際交流基金が各地機関の協力を得て実施。国内では日本国際教育支援協会が実施している。

問3 日本語能力試験の公式サイト内「よくある質問」を読めば詳しいことが分かる。

<http://www.jlpt.jp/faq/index.html>

受験年齢の制限はなく、国外では7月の試験が実施されない都市があること、従前の日本語能力試験では発表されていた「出題基準」がないことが分かる。ただし、障害者に対する「受験特別措置」については詳細が書いてないこともあり、この問題は消去法で選ぶことになるだろう。

問4 N1からN5までの各レベルの設定については、基本的事項と言える。

問5 新しい日本語能力試験の特徴の一つが尺度得点である。公式サイト「新試験の4つのポイント」に詳しい。<http://www.jlpt.jp/about/points.html>

試験Ⅱ

※試験Ⅱについては、音声の再現ができないため、当日受験者の解答のみです。解説はありません。御了承ください。

問題1

1番	2番	3番	4番	5番	6番
b	a	d	d	c	b

問題2

1番	2番	3番	4番	5番	6番
b	c	a	c	d	b

問題3

1番	2番	3番	4番	5番	6番	7番	8番
d	d	a	c	b	c	b	b

問題4

1番		2番		3番	
問1	問2	問1	問2	問1	問2
c	d	c	a	b	a

問題5

1番		2番		3番	
問1	問2	問1	問2	問1	問2
a	c	b	d	a	d

問題6

1番	2番	3番	4番	5番	6番	7番	8番
c	d	a	d	c	a	b	a

試験Ⅲ

問題 1

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
1	1	3	1	3

【解説】

- 問 1 1 /a/, /i/, /u/ は「基本 3 母音」とも言われる。/a/ と /i/ の中間が /e/, /a/ と /u/ の中間が /o/ である。
- 問 2 1 日本語のザ行子音を（語頭・語中問わず），歯茎摩擦音で発音しても歯摩擦音で発音しても意味の違いは生まれない。
- 問 3 3 韓国語は無アクセントの言語とされている。
- 問 4 1 形容詞が名詞を修飾する語順が前からか後ろからかということが，形容詞の性質が名詞に近いかどうかの根拠とは言えない。
- 問 5 3 「大勢の人が押し掛けた。」，「読んでない本が山積みだ。」など例はいくらでもある。

問題 2

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6
1	2	2	4	4	2

【解説】

- 問 1 2 機能語のほとんどは和語である。3 母語話者でも生涯を通じて語彙を習得し続ける。4 常に新しい語が生まれるのは実質語の方である。
- 問 2 シンタグマティック（統合的）な関係とは，語と語のつながりの面に着目したものである。「漕ぐ」という動作につながるのは，「自転車を」「ボートを」などである。
- 問 3 「一連の語」を「体系的」に提示するにしても，あれもこれもと欲張るのではなく，学習者の置かれている環境などから適切なものを選択する。
- 問 4 1 「道草をたくさん食べた」，2 「オイルを売る（油を売る）」といった例が考えられる。3 本来の意味を失っているわけではない。4 慣用句はその言語が使われている文化的な背景も大きく関わっているので，共通するものが多いとは言えない。
- 問 5 4 「写真を見せる」，「金を貸す」，「切符を渡す」など全てヲ格で共通している。
- 問 6 語彙学習は教室の中では完結せず，いつまでも続くと言える。自律的に語彙を増やすストラテジーを身につけることが重要である。

問題 3

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
2	3	2	4	1

【解説】

- 問 1 本文の「ある秩序において展開する」という「ある秩序」は，問 2 で問われている「ターン・テイキング」のメカニズムを暗に指していると考えられる。選択肢のうち，「ターン・テイキング」に関連する内容を述べているのは選択肢 2 のみである。話し手と聞き手の役割

が入れ替わるのは、「現在の話し手が、相手に話し手の役目を譲り渡す場合」と「聞き手が自分で話し手になる場合」の2か所で考えられる。選択肢2は後者が起こりうる場面として、現在の話し手の「言いよどみ」をとりあげていると考えられる。

問2 会話において、話し手と聞き手の役割が入れ替わることをターン・テイキングという。

問3 会話の終結とは、会話がどこで終わるのかを予想させる表現をさす。この際、お互いにそろそろ会話を終わりに向かわせるということを確認し合うのが「前集結」と呼ばれる段階である。それに沿うのは2。

問4 レポートの提出期限延長を教員が了解したことの確認を行うためには、選択肢2や3のような形で発話が考えられる。また、唐突な印象を与えないためには「では」という、これで会話を終わりにすることを相手に伝える言葉の一つ入れることが考えられる(選択肢1)。

問5 1は文型の定着がメインとなっている練習でしかない。

問題4

問1	問2	問3	問4
4	3	2	3

【解説】

問1 「前提」は発話状況についての、時間・空間・人間関係などの共有知識である。選択肢4で、「大阪です。」という発話が質問の答えになっているのは、「大阪は関西の一部である」ということが互いに共有されているからである。

問2 焦点（『応用言語学辞典』研究社）

話し手が発話することによって聞き手の関心を引くことを意図している文の中の特定の構成要素を焦点と言う。このように話し手の意図という観点から焦点をとらえると、焦点とは、会話の文脈の中の1つの構成要素に割り振られる1つの特性であると言える。談話の中のある文章には、たった1つだけ統語的な構成要素に割り振られた中心的な焦点がある。そして、この構成要素は、名詞句の場合もあれば、動詞句の場合もあり、時には文全体の場合もある。その際、文章の主題は、その定義からして、聞き手の関心をすでに引いているものであるから、焦点から除外されることがある。また、焦点は発話時点で話が聞き手の関心を引こうとしている構成要素であるから、後続する談話では、この焦点が今度は主題を構成することになる。（以下略）

選択肢1と4は語順が入れ替わっているが、「から」が文法的に焦点化していると言える。

問題は2と3。3で「焦点」と言えるのは、「日本語教師になった」というコトガラの方であろう。実際に、この後文が続くとすれば、日本語教師になったことで、どのような経験をしたか、どの国に行ったのか、どんな経験をしたか、などが続きそうである。上述の「焦点化されたモノが今度は主題となる」に合致する。2は「わけではない」が「理由」を焦点化していると言える。

問3 「は」と「が」の役割の違いに「新情報と旧情報」がある。

問4 本文で取り上げられたエピソードは、「水筒を持参する」ことが「飲み物持参」ということと同等であることを知らなかったというもの。選択肢3は、評価対象の「授業態度」について、担当教師の考える「良い授業態度」と学生の考えるものが異なっていたもので、ある特定のキーワードに対する共有認識のズレによるものという点で類似例である。

問題5

問1	問2	問3	問4	問5
1	3	2	4	3

【解説】

問1 文章の概要を素早くつかむ技術は「スキミング」と呼ばれる。

問2 ねらい(2)では、「記事の内容の展開を予測する」ということが挙げられている。各選択肢の見出しのうち、述語部分のない3がその「ねらい」に合致していると考えられる。

問3 「見出しから内容を推測」して読み進める場合、見出しの情報から記事内容を予測し、検証する過程をたどることになる。これはトップダウン処理と呼ばれるものである。

問4 「カタカナで書いてある選手名やルールがすぐに分かった」とあるので4のキーワード。

問5 この授業では「見出し」と「記事内容」の関連が中心的に扱われている。「見出し」と無関係な選択肢1, 2は論外。4は「見出し」のみに着目しており授業内容の総まとめにはふさわしくない。

問題6

問1	問2	問3	問4	問5
2	1	3	4	3

【解説】

問1 学習に関する信念、信条、確信などをビリーフという。教師の立場からは教師ビリーフ、学習者からは学習者ビリーフと区別して言うこともある。

問2 使う側の立場から教科書と接しているのは選択肢1のみである。

問3 選択肢3以外は、それぞれある部分についての自己チェックであって「全体像」ではない。

問4 体験談を記事にまとめたものは、語り口調に書かれているが、自然な話し言葉そのものではない。

問5 「初級クラス」「直接法」という設定から、選択肢3以外はレベル設定に難があり、適当とはいえない。

問題7

問1	問2	問3	問4	問5
1	4	1	3	2

【解説】

問1 韓国では1960年代後半から漢字廃止政策を取ったため、全く漢字が書けない世代もいる。漢字教育は少しずつ復活しつつあるが地域差もあるようである。選択肢4はインドネシアではなく、ベトナムについて。

問2 「技術研修のために来日」という前提から言えば、小学生がその成長とともに学ぶべき漢字として作られた学年別漢字配当表とは、自ずからニーズが異なる。仮に1006字全てを学んでも、「休暇」「化粧室」など大人として学ぶべき漢字は含まれていない。

問3 1指導予定の440字で造字成分となる基本的な文字を殆んど学ぶことになる。これらをもとに意味、読みの類推方法を知ることが、研修終了後の自学自習に有用と言える。

問4 語彙の指導＝意味(翻訳)の理解と書けること、に終始している。

問5 「寒い」が「気温や身体全体で感じる温度が非常に低いこと」、「冷たい」が「物質の温

度が自分の体温より著しく低いこと」という違いについて分かりやすく説明しているのは3である。

問題8

問1	問2	問3	問4	問5
1	3	2	3	3

【解説】

- 問1** TPR(Total Physical Response／全身反応法)に見られる活動であるが、これは幼児の母語習得過程を理論的根拠としており、聴解優先教授法の一つである。
- 問2** 書き取り（ディクテーション）は集中して聴くため聴解力を一定伸ばす効果は期待できるが、一方で細部にこだわり過ぎるあまり、全体像を見失うことも起こりうる。
- 問3** 現実場面では、全てが完全に聴き取れないことも多い。未知の語、何らかのノイズによる聴きもらしなどがある。その場合でも、聴き取れた周辺の情報から推測して情報を補完していく能力があれば、全てが聴き取れなくてもよくなる。
- 問4** わかったふりをしてしまうと、話し手は聞き手が理解していると思いこんでしまい、後で大きなコミュニケーション上の問題が発生する可能性がある。
- 問5** 「発信する」という観点からいえば選択肢3が適当。

問題9

問1	問2	問3	問4	問5
2	1	4	2	1

【解説】

- 問1** シャドーイングは、耳から入ってきた音のすぐあと（影／シャドウ）について口に出していくトレーニング法である。
- 問2** 「黙読」は高度な認知作業と考えられている。「音読」の方が先である。
- 問3** 「妥当性」には様々な観点がある。難易度の観点から「内容的妥当性」、テストの見た目から「表面的妥当性」などがある。「評価目標」の観点からは、「テストの目標が教育目標から見て適切かどうか」ということがポイントになる。選択肢4がこれに該当する。
- 問4** 相関係数は、二つの変数の間に何らかの関係があるかどうかを見るものである。因果関係を示すものではない。
- 問5** 二つの母集団の平均値に差があるかどうかを検証するための最も一般的な検定が t 検定である。

問題10

問1	問2	問3	問4	問5
4	4	2	3	3

【解説】

- 問1 「着ている」の「～ている」は「アスペクト」に関する誤用である。
- 問2 会話を中断せずにさりげなく誤用を指摘する手法を「リキャスト」という。Focus on Formは意味内容を重視しつつ、形式にも焦点を当てていく教授法である。
- 問3 リキャストは「さりげなく」誤用を提示するため、訂正されたことに気づかないおそれもある。
- 問4 母語転移の可能性としては、中国語話者の「的」が挙げられる。またこの誤りは第一言語習得においても観察される。
- 問5 選択肢3以外は「の」が不要であることをクローズアップしている。

問題11

問1	問2	問3	問4	問5
4	2	4	4	1

【解説】

- 問1 1990年の入管法改正で、「定住者」の在留資格が設けられ、南米日系人の来日が急速に増加した。
- 問2 直接ストラテジーは記憶、認知、補償。間接ストラテジーはメタ認知、情意、社会的ストラテジーである。情意ストラテジーは言語学習に影響を与えるような感情や態度、動機などをコントロールするストラテジーである。
- 問3 文化変容モデルとは、学習者が目標言語とその社会に対して持つ社会的及び心理的態度という観点から、第二言語習得について説明しようと試みるモデルである。エリカさんは「いつかはブラジルに帰る」という発言をしており、日本社会に対して社会的・心理的距離をとっていたことが、日本語（第二言語）の習得が促進されなかった理由と考えられる。
- 問4 「日本人のようにはなりたくない」という発言から、統合的動機づけは非常に低いと考えられる。
- 問5 1 マルシアさんに関して、問題文中に「また、英語やスペイン語などもできるので、語学学習そのものが得意だとも言えます」とある。

問題12

問1	問2	問3	問4	問5
3	1	2	4	4

【解説】

- 問1 1 シンptomは兆候、兆し。教育評価において、到達目標に向かって情意が高まっているかどうかの兆しを捉える際に使われる用語。3 サインランゲージはノンバーバル・コミュニケーションの一種。ジェスチャーで示すことのできる語、数、句読点などのあらゆる記号を指し、ヒッチハイク等の単独で使われるジェスチャーから、手話のような複雑な体系を持ったものまでを含む。4 シニフィエは「表され」なので、言語の方ではない。
- 問2 「周辺言語」ともよばれる。
- 問3 直前の「こんなに大きい魚」という発言と同時に「両手を左右に広げる」動作の事例を考えれば選択肢2。
- 問4 「言葉で翻訳できる明確な意味」を持っているのは選択肢4のみ。
- 問5 低文脈主義、高文脈主義とも言われる。

問題13

問1	問2	問3	問4	問5
1	3	2	4	1

【解説】

問1 平成16年度調査等を確認されたい。

問2 同上

問3 具体的な調査結果を知らなくても、文脈から「使われることが多い」「文字情報に付加されることでコミュニケーションの円滑化に寄与している」ということが読みとれるので、2が選べるだろう。

問4 発話がどのような意図をもったものかを推測するのがコンテキストである。

問5 厳しい文面で書いていても、笑顔の絵文字があれば「怒っているのは冗談」ということが伝わる。このような効果が絵文字などに期待される。

問題14

問1	問2	問3	問4	問5
2	1	1	2	4

【解説】

問1 阪神・淡路大震災をきっかけに言語サービスの充実が求められるようになった。

問2 「やさしい日本語」については、弘前大学人文学部社会言語学研究室 HP の次のページを各自参照されたい。<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>

問3 1ローマ字で表記されても中味は日本語である。

問4 外国人にとって日本語表記で最も困難な点は漢字である。振り仮名を振ることで分かりやすくなることは間違いない。

問5 外国人集住都市会議のサイトを参照のこと。<http://www.shujutoshi.jp/2010/index.htm>
「おおた宣言」の第2に「日本語学習機会の保証制度導入」がうたわれている。

問題15

問1	問2	問3	問4	問5
1	1	3	4	2

【解説】

問1 法務省広報発表資料を参照のこと

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00005.html
選択肢3, 4の「360万人」は海外の日本語学習者数の数字か？

問2 法務省入国管理局作成のリーフレットを参照

<http://www.moj.go.jp/content/000023246.pdf>

問3 日本に定住するための支援策として日本語教育のほか、農場での就労研修なども行っている。しかし、日本での生活の不安はまだ大きいようである。

問4 「永住」であるから、在留期間の更新は不要となる。

問5 「生活者としての外国人」という捉え方からシラバスが構築されている。

問題16

問1	問2	問3	問4	問5
4	3	3	2	4

【解説】

問1 通常の在籍クラスから「取りだして」行う授業である。

問2 JSL カリキュラムでは、児童・生徒の認知的発達にも考慮している。いわゆる生活のための日本語はすぐに習得できても、教科学習のための日本語習得に時間がかかるという問題点に対して、教科学習と切り離さない日本語学習を行うことで、学ぶ力の育成を目指している。

問3 一部地域の調査にとどまっている。

問4 外国人児童生徒の母語を尊重した選択肢は2しかない。母語使用の禁止や家庭にゆだねるなどは論外な姿勢。

問5 国際的な評価を受けた外国人学校が選定され、大学入学資格が付与される学校として告示されている。

文部科学省 大学入学資格について (下記 URL の⑤を参照のこと)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shikaku/07111314.htm

問題17

(参考解答例)

学習者の希望に沿って、すべての間違いを指摘、訂正する。ただし、会話の授業なので、会話の流れを切らないようなフィード・バックを用いる。また、短期の留学の効果を上げるために、ポートフォリオの作成を支援する。

フィード・バックは暗示的なもの、明示的なものの両方を用いる。また、ビジター・セッションを設け、教師以外の母語話者からの誤用に対する指摘・訂正も利用する。

教室活動としてはロール・プレイなどを実施して、参加者全員に誤用を考えさせる。訂正候補も上げさせ、正しい表現、よりよい言い方を考えさせて、追加事項があれば、最後に教師が指摘する。

授業の全部を録音し、ポートフォリオの一部として全員に提供する。また、誤用訂正についても全員の分を全員に文書として配布する。短期間の学習をより効果的にするためである。この二つの提供により帰国後の自律的な学習も支援する。(389字)

【解説】

ポイント1 問題で問うている事柄は何か。

「この教室活動の中で、間違いの指摘および訂正をどのように扱おうと考えるか」

ポイント2 「理由となる考え」とは何か。

会話の授業。学習者の希望。学習の効果。

「間違いの指摘および訂正」をどの程度行うかは、学習者のニーズに従いすべてを指摘、訂正すべきであろう。学習者の発話機会を多くするため、ロール・プレイ、ディベートなどの活動が多くなるが、その場での指摘は、会話の流れさえぎるため、活動後に行うのが適当である。

また、教師以外の母語話者からの指摘、訂正機会も与えたい。

最後に、短期学習者であることを考慮し、ポートフォリオの一部に、今回の授業を全部録音したものと、誤用訂正を文字化したものを提供することで学習効果を最大限に上げたい。

以上のような観点を 400 字以内にまとめれば、合格水準と言えよう。